

第1章 研究の目的と経過

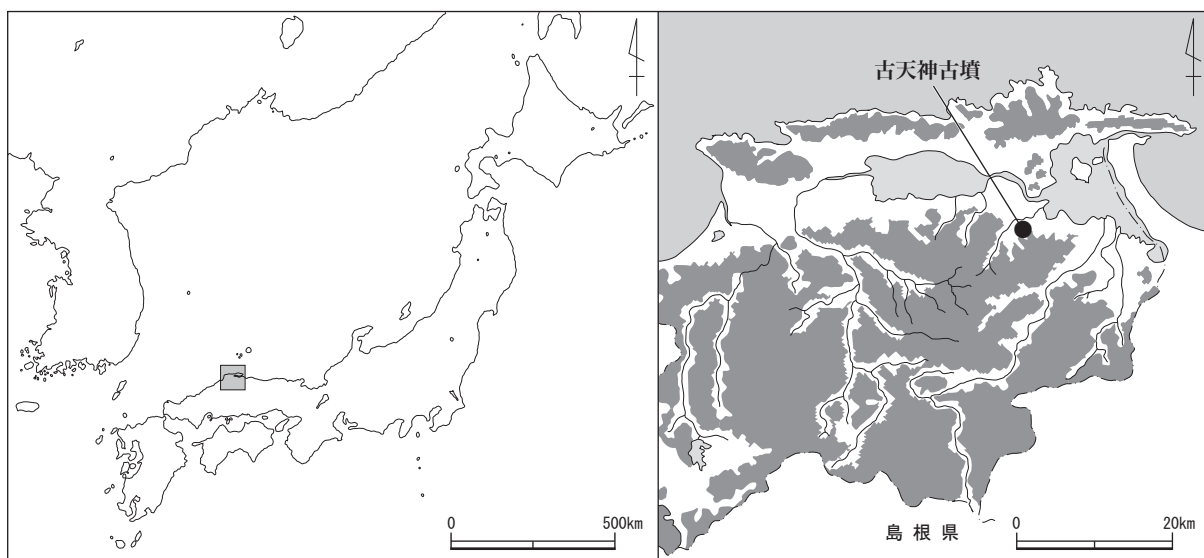
1 研究の目的

古墳時代地域社会の実態解明は、日本列島における国家形成を議論する際の根幹をなす研究課題である。そして、地域に根ざした論題のなかでも古墳時代の社会編成の分析は、古代地方行政単位の成立に至るプロセスを考えるうえでも重要な視座をもたらす。こと出雲地域は古墳時代墓制に在り性がみとめられ、上記の議論に地域の実態から資することを期待しうるフィールドであるといえよう。

しかし、地域の実態解明を推し進めるにも、検討課題は山積している。というのも、地域史を語るうえでの材料が存在するいっぽう、必ずしもその実態の明らかなものばかりではなく、議論の基礎となる資料が整備されているわけではないからである。たとえば古墳に限っても、近年は首長墓の発掘調査例が少なく、古くに調査された事例については近年の精緻化した個別研究成果をふまえた検討に耐えうる再資料化が必要な段階にある。それは、出雲型石棺式石室をもつ古墳でも例外ではない。

島根県松江市大草町に所在する古天神古墳は、墳丘長約 27 m の前方後方墳である（第 1 図）。その埋葬施設は出雲型石棺式石室の最古型式とも評価され〔出雲考古学研究会（編）1987、角田 1993 など〕、古墳時代出雲の地域社会を考えるうえでの第一級資料であることは論をまたない。そうした資料的な重要性の高い古墳であるにもかかわらず、古天神古墳から出土した遺物群の総合的な検討は、1915（大正 4）年の発見以降これまでになされたことがない。つまり、古墳そのものの評価に必要な出土遺物の諸情報が網羅的には提示されないまま、現在に至っているのである。しかし、古天神古墳を地域さらにはより広域の社会関係のなかで位置づけ、出雲の地域社会がもつ特質の背景を論ずるには、まずは既知の出土遺物についての基礎情報の整理が不可欠である。本研究がもつ学術的意義の重要性はその課題解決にあるといつてよい。

本研究では、既掘考古資料を再検討する目論みのもと古天神古墳にかかわる考古学的情報を資料化することを第一の目的とし、それを基礎に諸要素の検討から古墳そのものを多角的に評価する。さらに、その成果を地域史はもちろん、古墳時代社会の議論に資するための材料とすることをめざす。



第 1 図 古天神古墳の位置

2 研究の経過

研究に至る経緯 古天神古墳についての研究活動の発端は2012(平成24)年12月5日にさかのぼる。考古学実習でとりくむ鉄製品の実測に際し、受講生とともに鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて、研究室所蔵の伝古天神古墳出土品のX線ラジオグラフィの撮影を実施した。撮影前の肉眼観察でも存在を予測していたが、鉄刀の鐔・鏹・柄縁責金具に象嵌がほどこされている点を確認した。

この発見と資料的な重要性を鑑み、2013(平成25)年1月30日の東京国立博物館での特別観覧の際に、同館主任研究員の古谷毅氏と打ち合わせをおこない、鳥根大学所蔵品と東京国立博物館所蔵古天神古墳出土品の実物を直接的に比較検討する必要性を相互に認識した。

その後、2013(平成25)年4月に法文学部内の研究組織である山陰研究センターから研究課題の募集があった。折しも山陰地方において古くに出土した古墳資料の再検討と二次資料化を実施してきた経緯もあって、その成果公表を主たる目的とした研究課題を設定・応募し、幸いにもこれが採択された。課題名は、『山陰地方における既掘考古資料の再検討と歴史文化遺産の持続的活用』(研究代表者 岩本崇・課題番号1304)である。2016年度からは研究プロジェクトは2期目に突入し、『山陰地方における既掘考古資料の再検討による歴史文化遺産の活用と地域還元』(研究代表者 岩本崇・課題番号1602)として継続中である。

研究体制 研究を円滑かつ効率的に推進するため、分担を異にするメンバーからなる古天神古墳研究会を組織した。研究会の構成と役割は以下の通りである(所属は参加時)。

岩本 崇	鳥根大学法文学部	埋葬施設・鏡・馬具の検討、総括
大谷晃二	鳥根県立松江北高等学校	装飾付大刀・大刀・剣の検討
古谷 毅	東京国立博物館	金属製品の検討
河野正訓	東京国立博物館	短刀の検討
土屋隆史	宮内庁書陵部	鉄鏃の検討
磯貝龍志	鳥根大学大学院	工具の検討
岩本真実	鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター	須恵器の検討
土井翔平	明治大学大学院	鉄製品の接合
北澤宏明	國學院大學大学院	鉄製品の接合
井上由美子	立正大学卒業生	鉄製品の接合

出土品の二次資料化 東京国立博物館の特別観覧を通して、まず劣化した資料の接合確認と東京国立博物館所蔵資料と鳥根大学所蔵資料を比較検討し、観察・実測図作成・写真撮影へと順次調査を進めた(第2図)。述べ23日におよぶ特別観覧によって、東京国立博物館と鳥根大学が所蔵する古天神古墳出土品の二次資料化を完了することができた。調査日程と概要、参加者は以下のとおりである。

2014年2月18日～20日	接合確認・検討(岩本崇・古谷・河野・土井・北澤・井上)
2014年7月1日～3日	接合確認・検討(岩本崇・大谷・古谷・河野・土井・北澤・井上)
2015年1月28日～30日	実測図作成(岩本崇・大谷・河野・土屋)
2016年1月27日～29日	実測図作成(岩本崇・大谷)
2016年3月7日～10日	実測図作成(岩本崇・大谷・磯貝・岩本真)
2016年5月30日～6月1日	実測図作成(岩本崇・土屋)
2016年11月7日～9日	写真撮影(岩本崇・大谷・土屋・磯貝・岩本真)

このほか、鳥根大学所蔵資料や地元研究者による採集資料⁽¹⁾の二次資料化を適宜実施した。

シンポジウムの開催 出土品の二次資料化をおおよそ達成したことをふまえ、島根大学法文学部山陰研究センター・島根考古学会合同シンポジウム『出雲型石棺式石室の出現を考える—島根県松江市古天神古墳出土品再調査の中間報告—』を2016年11月13日に開催した(第3図)。開催趣旨は、各種遺物の年代的位置を確認し、古天神古墳の築造年代を明らかにすることを通して、出雲型石棺式石室の出現時期を探る点に置いた。約65名の参加があり、討論を通して本書作成に向けての課題を明確化することができた。内容は以下の通りである。

- 報告1「大 刀」 大谷晃二
 - 報告2「鉄 鏃」 土屋隆史
 - 報告3「須 恵 器」 岩本真実
 - 報告4「鏡と馬具」 岩本 崇
- シンポジウム

「出雲型石棺式石室の出現を考える」

(コーディネーター：松本岩雄)

埋葬施設の二次資料化 古天神古墳をめぐる論点として、副葬品が出土した後方部埋葬施設を出雲型石棺式石室との関係のなかでいかに評価しうるかは、本研究の学術的意義を高めるうえで不可避な議論である。そこでこの課題を解決する基礎的な材料を得るため、島根県教育庁文化財課ならびに島根県教育庁埋蔵文化財調査センターのご理解とご協力を得て、後方部に露出している埋葬施設を対象とした調査を実施した。調査は現状の記録を目的として、実測図作成と写真撮影をおこなった。調査は2017年3月21日より着手し、土日など休日を利用して4月29日に完了した。実働日数は14日間である。なお、写真撮影に際しては、SfM (Structure from Motion) による画像処理をベースとした三次元形状復元技術に資するためのデータを得るよう努めた。写真撮影は3日間を要した。埋葬施設の二次資料化にあたっての作業は、岩本崇と岩本真実があたった。三次元モデルの作成は、岡本篤志氏(大手前大学史学研究所)に依頼した。



1. 鉄製品の接合検討 (2014年7月)



2. 実測図作成状況 (2015年1月)



3. 実測図作成状況 (2016年3月)

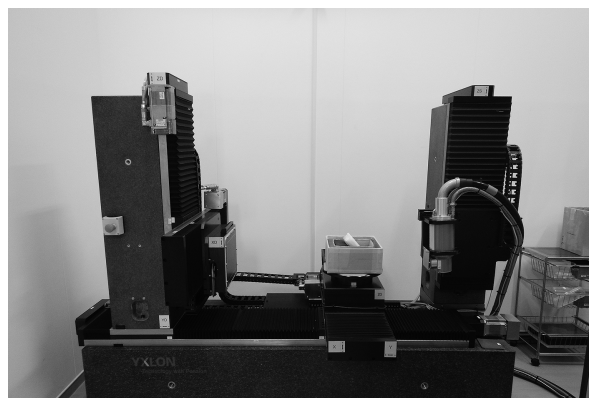


4. 写真撮影状況 (2016年11月)

第2図 調査研究の経過 (1)



1. シンポジウムの開催 (2016年11月)



2. 九州歴史資料館におけるX線CT撮影 (2016年6月)

第3図 調査研究の経過 (2)

出土品の保存処理 鳥根大学所蔵の鉄製品については、X線ラジオグラフィによって象嵌の存在が明らかとなった。しかし、象嵌は現状では鉄錆に覆われているため、目にすることができない。そこで、これを肉眼でも観察できるよう象嵌の表出作業をおこなうとともに、保存処理の実施を検討した。そして、公益財団法人朝日新聞文化財団による文化財保護活動助成に応募したところ、幸いにもこれが採択された。事業名は『出雲型石棺式石室出土金属製品の保存修復と公開』（申請者：鳥根大学法文学部考古学研究室）、助成期間は2016・2017年度である。

保存処理前の作業として2016年6月12日に、九州歴史資料館のご協力によりX線CTスキャナーによる撮影を実施し、X線ラジオグラフィでは確認しえない三次元情報を得ることができた（第3図、図版11-5）。また、東京国立博物館所蔵品の資料化にあわせて、処理前の実測図作成と写真撮影を2016年11月におこなった。

保存処理作業は2017年5月より開始し、2018年2月に終了した。保存処理は、株式会社吉田生物研究所に依頼した。あわせて、象嵌の種類を特定するため蛍光X線分析を実施した。その結果、銀象嵌であることが確認された。なお、資料搬出後の作業を株式会社吉田生物研究所において都合3回にわたり実施した。2017年6月の搬出直後に、未完了であった一部の処理前実測図の作成と打ち合わせをおこなった。保存処理作業がある程度進んだ段階で、本書に掲載する資料の処理後の実測図作成と写真撮影をそれぞれ2017年12月と2018年1月に実施した。

註

- (1) 地元研究者による採集資料として、本庄考古学研究室によるものと恩田清氏によるもの〔伊藤ほか2008〕を本報告の対象とした。なお、本庄考古学研究室が採集した須恵器2片は鳥根大学法文学部考古学研究室が所蔵する採集資料と接合することが明らかとなったことを受け、同研究室より鳥根大学法文学部考古学研究室に寄贈を受けた。したがって、本報告では鳥根大学法文学部考古学研究室所蔵資料としてとりあつかっている。

引用文献

- 出雲考古学研究会（編）1987『石棺式石室の研究—出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討—』古代の出雲を考える6
- 伊藤徳広・稲田陽介・深田浩・丹羽野裕 2008「恩田清氏採集資料の整理報告」『古代文化研究』第16号 鳥根県古代文化センター pp.1-7
- 角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『鳥根考古学会誌』第10集 鳥根考古学会 pp.69-103